

約1千億円を出して社会貢献した大原孫三郎

—米国のロックフェラーに匹敵する—

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

『日本のメセナ、フィランソロフィー(文化社会貢献)の父』といわれる大原孫三郎は生涯稼いだ1千億円近い金をすべて社会に還元した。



彼が作ったものは西洋美術館、社会問題研究所、農業研究所、民間大病院、孤児院、民芸館、市民セミナーなど日本で最初のものが多く、百年先を見通した、世界にも例の少ない尊敬あたわざる企業家である。

大原は明治13年(1880)に岡山県倉敷市の大地主の息子に生まれた。東京専門学校(早大の前身)に入学したが、遊び過ぎて今の金で1億円以上の大借金を作る。

義兄がこの処理で奔走中に急死し、孫三郎は後悔と罪の意識にさいなまれた。

二十歳で、岡山孤児院をつくった社会事業家・石井十次に会い、そのキリスト教人道主義に感化されて『報徳紀』(二宮尊徳)と『聖書』を熟読した。



「倉敷を東洋のエルサレム」にすると決意し、明治三十五年六月の日記には

「財産を与えられたのは自分のためではなく、世界のためである。金は神のため世界のために使う」と記した。

二十六歳で家業の倉敷紡績社長を継いだ。経営手腕を発揮して西日本屈指の実業家となる。

最初に手がけたのは社会事業で大正三年、約千二百人の孤児を収容していた日本最大の『岡山孤児院』の院長に就任して、物心両面から援助した。



岡山孤児院

当時、女工哀史や庶民が医療を十分受けられないことに、心をいためていた大原は建設費約200万円を提供して、庶民のための理想的病院づくりに取組んだ。

米ロックフェラー病院を手本に、倉敷市内に敷地三万五千平方メートル、二百二十ベッドの大病院を建設した。完全看護、入院料の等級のない、見舞品の持ち込み禁止の患者本位の病院を作った。

級のない、見舞品の持ち込み禁止の患者本位の病院を作った。

大正7(1918)年8月、米騒動が起こり全国へ波及し、貧民対策、社会運動が盛り上がった。大原の真骨頂はその人間愛、ヒューマニズムであり、社会問題への関心と取り組みで、『貧乏物語』を書いた京大の河上肇教授に相談し、社会問題研究所の設立を決意した。



当時、「社会」は「アカ」(共産主義)と同義語であり、「社会問題」は危険思想視された。政府は「生活問題研究所」に変更せよ圧力をかけたが、大原は屈しなかった。

私財十五万円(現在約三十億円)、毎年の運営費として十万円を提供して、東大経済部の

高野岩三郎教授を所長に招き、大正八年(一九一九)、大阪天王寺に研究所を完成した。

「この研究所を世界的に立派なものにしたい。自分はもうけた金は全部社会のために使い果たすつもりである」と大原は述べた。

所員として榎田民蔵、森戸辰男、久留間鮫造、大内兵衛、笠信太郎、長谷川如是閑ら当時の代表的な社会学者が一堂に会した。



倉敷といえば、大原美術館といわれるほど今や有名になったこの美術館を作ったのは何と70年以上も前の昭和五年(1930)のことである。

この2年後に満州事変の現地調査のために国際連盟から派遣されたリットン調査団の一行が、こんな日本の片田舎にモネ、ルノワール、エル・グレコなどの名画やロダンがならんだ世界レベルのギリシャ風の美術館があるのに驚いた。という。

企業美術館ではサントリー美術館やブリヂストン美術館などあるが、大原がグンをぬいて先駆的であった。開館当初は一日一人の入館者もなく、「美術館が一番重荷だ」と孫三郎は歎いていたが、今や日本を代表する美しい町並みとその文化の発信基地となっている。



ますます拝金主義になっていく世の中。「金を使うことで高く自己の目標を掲げて成功した人物として、日本の財界人でこんなに成功した人はなかった。

三井も三菱も、いかなる実業家よりも偉大な結果を生んだ財界人である」と大内兵衛は評価している。

< 禁転載 >

大原美術館
所蔵名品展

2003年8月19日(祝)～9月28日(日)
大原美術館所蔵名品展
大原美術館
大原美術館

